

日野啓三『向う側』論

——言葉の外部へ向かう試み——

はじめに

日野啓三の『向う側』¹は、彼の小説第一作である。これまで、『向う側』という言葉は、日野の作品について論じる際のキーワードとして使われてきた。例えば、日高昭二氏は、日野の作品に一貫する「向う側」へのヴィジョン²を検討する必要を述べ、石田忠彦氏は、『向う側』がハ発展³していくとして、その過程を検討している。

いうまでもなく、これらの前提には、『向う側』において作者が提示したものが想定されている。しかし、『向う側』そのものについての論及は、管見に入っていない。示唆に富む石田氏の論においても、『向う側』は、次のような日野自身による説明をそのまま受け容れる形で理解されている。⁴

『向う側』は勤め先の新聞社の特派員として、南ベトナムに八か月ほど常駐して帰ってきた翌年に書かれた。この中で、『向う側』とは、解放戦線の支配する解放地区のことだが、サイゴン政権側からはそのような地区は存在しないことになっている非在の場所であり、實際上サイゴン側の人間は入りこむことはできず、入りこめば原則的

に戻ってくるこの世の境の果ての世界、非現実の場所を、私は書きた。そういうこの世の境の果ての世界、非現実の場所を、私は書きたかったわけだ。⁵

山根繁樹

この説明は、日野自身が『向う側』執筆の意図を述べたものとして重要である。だが、これも、日野自身が自分の作品群を『流れ』として見出していく中で述べられたものであることは、注意されてよい。また、『書きたかった』ことが実現されたか否か、あるいは、それがいかに実現されているかということとは、検討される必要がある。

以上のような、『向う側』をめぐる現状を踏まえ、本稿においては、『向う側』そのものの分析を試みる。それは、『向う側』における『向う側』を読み解くことになろう。そして、それは、日野の小説において変容しつつ一貫して現れる『向う側』が、何故常に『向う』でなければならぬのかを検討するための、指標となるはずである。

『向う側』は、二つの異なった言説空間によって構成されている。その二つは、内戦状態の国で『向う側へ行く』⁶と言いつ残して消息を絶つた特派員『彼』と、『彼』についての調査をめぐるものである点で共通している。だが、一方は、調査を行った『私』がその調査の過程を振

り返る、独白であり、もう一方は、《彼》についての調査報告がなされ、対応策が検討される、会話である。この二つの言説は、交互に作品中で組み合わされ、それぞれの内容を補い合いつつも、異なった《向う側》理解を提示して終る。それは、それぞれの言説自体の必然でもある。だが、最終的には、その異なりの緊張関係が生み出すものが何であるのか、その実体こそが解明されなければならない。

一、既成の認識の枠組に対する疑念

《私》の調査において解かれるべき謎は、《彼》はどこに消えたのか、ということである。そして、《私》は、《彼》が《向う側へ行く》と言つて姿を消したことを知る。《私》は、《向う側》という言葉の意味を説明しなければならぬ。それに対して、その解答を既に持っていると思ひ込んでいる人間もいる。大使館の若い事務官がそれである。彼は、《向う側》を、次のように理解している。

《事務官はよく磨かれたガラス窓越しに、一ブロック先の川の対岸——粗末な農家と椰子の林が散在するほかは、陽炎の燃える畠が地平線までのびひろがる広い地帯を眺めながらいった。あの川ひとつ向うでさえ、完全にこちら側ではないんですよ。夜になると、ゲリラが自由に出没します。

向う側とは、そういう意味なのでしょうね。

まずそうでしょう。(略)それとも他に何か意味が考えられますか。)

ここで、《向う側》という言葉は、ゲリラの出没する地帯を意味する。若い事務官のこのような理解は、内戦で敵対する二つの勢力の、政府

側の支配下にいるという自覚から生まれている。《向う側》という言葉は、《こちら側》という言葉との対応において意味を持つ。そこで、若い事務官は、《彼》と共に自分も属している《こちら側》を想定し、《向う側へ行く》ことを理解しているのである。そして、このように理解すれば、《向う側》という言葉の意味は、明確であるようにも思える。しかし、《私》は、疑念を抱く。何故か。

作品の冒頭場面から若い事務官に会う場面まで、《私》の認識は、留保と不確定を繰り返す。冒頭場面において、《私》は、雑多な街の様相を捉えながら、そこを《ええたいの知れぬ街だ》と考えている。《私》は、その街の雑多な様相を捉えつつも《恐らく……だろう》という不確定の認識しか持てない。それは、見知らぬ街に降り立ったという外的な要因によるだけではなく、《私》の認識自体の限定性にもよるのである。そのような、《私》の認識のありようは、大使館を訪れた場面でも続いている。《私》は、若い事務官に会う前に、大使館の隅で話し込み《私》が入っていくと黙り込んだ現地人の様子を見た時、はっきりと次のように自覚しているのである。

《暮し向きの話だったのかもしれないし、あるいは重要な秘密の相談、たとえば密輸とか、あるいは運転手にしては眼つきも動作も何となく鋭すぎるこの若い男が、この市に何百人、一説によると何千人も潜入しているといわれるゲリラ側の工作員で、秘密の指令を伝えていたのかもしれない。誰にもわからない。本人をつかまえて拷問してみても、わからないかもしれない。どこにどんな人間でもいいし、いつどんなことでも起こりうる、という感じがはっきりと私の頭の中を通りすぎた。)

《私》は、人間や様々な事物を理解することの、限界を感じ始めている。それぞれに意味がないわけではない。運転手は、少なくとも運転手として意味付けられており、それとして認識されている。しかし、それは、運転手を職業としている男のすべてではない。運転手は、確かに運転手でありながら、それ以外の何者かでもあり得る。例えば、ゲリラ側の職員であるかもしれない。このような、認識できること、理解できることの限定性の自覚は、自己の認識の枠組自体の有効性を疑うことと同時に生じているのである。

そのことは、若い事務官の言葉を聞いた時にも持続していた。若い事務官の《向う側》理解は、《私》の認識の枠組においても共有され得る。だが、《私》は、《彼》という一人の人間が突然消息を絶つという不可解な事件を、《私》の有効性の疑わしい認識の枠組内で理解することにとためらうのである。そして、《私》が若い事務官の理解を拒んで《向う側》の意味を発見しようとするならば、それは、《私》自身の認識の枠組を、若い事務官のそれとは異なるものとして作り上げることには他ならない。

《私》は、まだ、《向う側》の意味を見出しはしていない。だが、若い事務官の《向う側》理解を聞いた時、そのような仕方では理解することを可能にする世界とは、なんらかの形で異なる世界があるのではないかという《感想》を抱いている。

《そしてその教会堂の頂きの小さな白い十字架が、まわりの椰子の群の動物的なまでになまなましい濃緑色の生命力の渦巻きの中に、ひどく際立って、というのも決して毅然としてという意味ではなくむしろ弱々しく頼りなげにだが、この陽光の下の生命の営みの世界

——それについてわれわれが安心して認知し話し合い証明できる世界だけが、世界ではないことを、懸命に訴えかけ証しだてようとしているように、私にはみえた。》

ここで、《私》は、《安心して認知し話し合い証明》することを保証する、既成の認識の枠組自体に対して、異相感を持っている。そして、既成の認識の枠組を何らかの形で越える可能性、それによって見出される世界を想定しているといえる。ここにある《十字架》とは、そのような新たな認識の枠組の比喩であり、《私》が、それ自体は既成の認識の枠組として機能するキリスト教的世界を想定していると短絡してはならない。

では、《私》は、《彼》が向かって行った《向う側》を、どのような世界として見出すのであろうか。

二 《彼》の残した言葉 《人間の条件》

《私》は、《彼》が事務所兼居室にしていた部屋で、取材メモのノートにさりげなく書かれた、次のような文句を発見する。

《人間とは——と頁の端にふと書きこまれたらしいそのボールペンの文字は読みとれた——人間の条件を絶えず逃れようとする忌まわしい傾向性だ》

《人間の条件》という箇所が、なぜか《存在の条件》と書いたのを消して書き直してあった。》

《私》は、この文句がどのような状況で記されたのかを判断することができない。また、その意味を翻訳し理解することもできない。ただ、《私》は、その文句に共鳴する自己を見出すだけである。

では、ここにある《人間の条件》とは何か。それが、《存在の条件》ではなく、《人間の条件》であるところに、それを解く鍵はある。ここでは、存在するということが問題にされているのではなく、「人間」であるということが問題にされているのだと考えるべきである。つまり、人間が、「人間」としてあることの条件が、問題なのである。しかし、この箇所だけでその《条件》を確定することはできない。ただ、ここでいわれている二つの《人間》を考えてみれば、《人間》は、《人間の条件》を逃れ得ないことがわかる。「人間」としてあることの条件を逃れたとすれば、既にそれは、「人間」ではなくなってしまうからである。

ここで、次のように考えてみることはできる。先の若い事務官は、事務官として生き、そのことで世界と自己を見出していった。同様のことは、特派員として生きていた《彼》にもいえるはずである。それを、世界の中の存在の自覚といってもよい。「事務官」や「特派員」という意味付けを拒んだとしても、「夫」であったり「男」であったりし、結局「人間」であるという意味付けと共に、世界と自己を見出すことになる。つまり、人間は、何らかの関係性において意味付けられることによって、「人間」として生きることができるのである。《人間の条件》がそのようなのだとすれば、それを逃れようとすることは、自己と世界を失おうとすることである。それは、既に「人間」としてある者にとって、逃れようとする主体としての自己そのものを失おうとすることであり、矛盾に満ちた《忌まわしい傾向性》として意識される必要があったと考えられる。そして、彼は、その《傾向性》にこそ、人間の本質を見ていたのである。

彼の残した文句は、取材メモのノートという、《彼》が特派員としてその中を生きねばならなかった、論理付け証明し説明しようとする言葉の満ちた中に発見された。そのことによって《私》は、《彼》の、特派員であることに還元されない感慨を読み取っている。

《略》熱心で優秀な特派員という彼の表面（決して仮面という意味ではない）にふと走った一種の亀裂——そこから人間であることあるいは人間でしかないことの条件を荷いつづけねばならなかったひとりの人間の底知れぬ内部の少なくとも一部がのぞけてみえる。ごくわずかだが、疑いもなく深い亀裂を見たように思えた。

《私》は、自分自身の内にも、《彼》の文句に《反響》するものがあるのを感じている。そのことは、後に《私》自身が《向う側》に到ろうとする時、より明確な問題として意識されることになる。

三 《男》 にとつての 《向う側》 / 《ナッシング》

《向う側》についてももう一つの理解を持つ人物《男》が、作中に準備されている。《男》は、《彼》が《向う側へ行く》と言い残した現地人である。《男》は、《彼》が特派員としての任務から離れて親しくしていた人物で、《私》は、《男》を通して《彼》という人間に近づいていく。

《私》は、市の中心にある広場で《男》に会う。《男》は、《彼》と二人でよく長い間広場のベンチに座っていたと言い、二人共広場がからっぽになってゆくのが好きだったと言う。《男》自身は、広場がからっぽになるにつれて気持が充実してくるとも言うが、それに対する《私》の共感、次のように退けられる。

《ぼくだってわからないことはない、と私はいった。静かなのは好きだ。

静かというのとはちがう、と男はきびしい口調でいった。静かというの何かが在るひとつの状態だ。単に動かないというだけのことだ。おれのいうのは、何もないことなんだ。》

《私》は、《男》のこの言葉に対して、《どこだって、いつだって何かがある》と反論しているが、論理的には、《私》が正当である。《私》が指摘する通り、《何もない》と言う時も、《男》自身は「ある」。ここで《男》は、論理的に《私》に対抗しようとはしない。《男》は、非論理の側に立ち、《私》は、論理の側に立っているようにみえる。だが、《男》の言う《何もないこと》は、既成の認識の枠組を、その枠組自体の中に在りながら、否定しようとするものだともいえる。

これに続いて《男》は、消えてしまった《彼》の言葉と、自分の感慨を繋ぎ、次のように言う。

《彼がこんなことをいってたよ。いまでもよくおぼえてるんだが、こんなにもいつもむなししい思いが全身にしみこんでくるというのは、きっとむなしさというものが確かにあるからにちがいない、とね。そんなものがどこにあるんだ、と私はなおもき返した。

男はぼそりとまるで独り言のようにいった。きつと向う側だ。》
《男》の言葉は、《向う側》について、次のような理解を促す。広場がからっぽになることで気持が充実してくる《男》にとつて、既成の認識の枠組によって見出される世界は、自己存在を曖昧にしか感じられない世界である。そのことが《むなしさ》を促す。《むなしさ》とは、事物が意味を持って在ることへの否定的な言葉である。既成の認識の

枠組において見出される、世界の意味、その中に在る自己存在の意味を疑わせ、既成の認識の枠組自体を疑わせる言葉だといってもよい。それは、《何もないこと》を求めようとする《男》の態度を支える思念でもあろう。だが、そのような《むなしさ》もまた、既成の認識の枠組を越え出た言葉ではない。だからこそ、《男》は、《向う》を想定する。既成の認識の枠組においては見出され得ない世界が、《きつと向う側》にあるとされねばならないのである。つまり、《こちら側》とは、既成の認識の枠組によって見出される世界であり、それが廃棄されて自己存在を確かに掴み得る世界が《向う側》なのである。

ここまでは、《私》の独白の中に登場する人物の《向う側》理解を検討してきた。《男》の言葉が示す《向う側》理解は、若い事務官の理解する《向う側》をも《こちら側》のものとして含み込むものである。そして、それは、《私》が抱いていた既成の認識の枠組に対する概念と、《彼》の残した文句に対する《私》の共感に、接近していると読み取ることができるとは、次には、これ以降の、《私》自身が《向う側》を理解していく過程を検討しなければならぬ。しかし、その前に、《私》と《男》が広場で語り合った場面と、《私》自身が《向う側》を理解しようとする場面の間に挿入されている、会話の時間の、報告を受ける人物の発言に注目したい。なぜなら、それが、作品構成上、決して自覚的なものとして語られてはいなかった《男》の《向う側》理解を補完し、《私》が《向う側》を理解しようとする場面を準備する意味を帯びているからである。

その発言とは、次のようなものである。

《——形のない混沌というものは、ナッシングだ。存在しないと

一じなのだ。何らかの形がついて初めてそれはサムシングになる。そうだという決定的な証拠はないとしても、そうではないという決定的な反証もない限り、われわれは比較的に整ったひとつの形式を、この事件につける責任と義務がある。社会というものは、そういう風にして成り立ち、かつ動いてゆくものなのだ。」

ここからまず第一にいえることは、意味付け得たことから論理的に判断しようとする態度で一貫した、この一連の会話が何を意図して交されているのが、この部分で明らかになっているということである。同時に、意味を伝達する機能を端的に示す、会話の言葉のみによって構成された言説空間が持つ意味は、この部分自体によって語られている。つまり、この会話は、《彼》の事件を、既成の認識の枠組の中で意味付けることを至上命題として交されているのであり、その意味では、《こちら側》の世界を、成り立たせ、維持していく場なのである。そのことから、一連の会話が、《彼》が消えた事件を、若い事務官と同じ《向う側》理解で結論付けていることは、この言説空間の論理における必然なのだといえる。

一方で、この発言は、《こちら側》の論理を提示することで、《向う側》を意味付けてもいる。この発言をしている人物は、《形のない混沌》を確実に意識し、それが存在しないのではなく、《存在しないと同じなのだ》と言っているのである。《形のない混沌》が《ナッシング》なのは、それが既成の認識の枠組に組み込まれていないからである。《社会》とは、意味付けられた事物によって構成されたものであり、《形式》とは、既成の認識の枠組における意味付けに他ならない。この人物は、《形のない混沌》を意識しながら、それを《ナッシング》とし、《責任と義務》

を遂行することによって、自己存在を維持しようとしているのだといえる。それは、《向う》の世界を想定しながら《こちら側》にいる点で《男》と共通し、《こちら側》を維持し、そこに自己存在の意味を見出すとする点で《男》と相反する態度である。

それでは、《私》は、《向う側》の意味をどのように見出すのであろうか。

四. 《私》の到達点

《私》は、タクシーに乗り、市から外へ出る。検問所で武装警官に《彼》を見かけたことはないか尋ねる《私》は、調査を放棄してはいない。だが、《私》は、《彼》がゲリラ側の支配地域という意味での《向う側》に行ったのだと、信じているのではない。《私》は、武装警官が検問所の中で同僚に《彼》の写真を見せている間、不意に《自分は何でこんなことをしてるのだらうという疑問》を感じており、それでも進もうとする理由は、次のように説明されている。

《何か異常にはげしく熱いものが内側から私を駆りたてていた。私は進まねばならなかった。行くところまで行くことを、その熱いものは命じていた。》

つまり、既に、進むことは、《彼》についての調査のためではなく、《私》自身のためなのである。調査を進めながら、《彼》を身近に感じ始め、《男》の語る《向う側》を聞いた《私》は、自分自身にとっての《向う側》の意味を見出そうとしているといえる。その行動は、次のような《逃亡者》の自覚を促す。

《追跡者のはずが、いまは逃亡者だ。私は彼がこの国道を通ったと

は(いや別のどの国道も)もはや全然信じていなかった。彼の体が、という意味だ、だが彼の心がいま私の進んでいる道——逃亡者の道を進んだことは、ほぼ確信していた。どちらの道も向う側に通じている。

《私》の《逃亡者》の自覚と、《逃亡者》としての《彼》の、微妙な差異に注意しなければならない。《私》が、《もはや全然信じていなかった》という時、《私》は、《彼》がゲリラ側支配地域という意味の《向う側》に行ったのではないと確信している。《彼の体》が、国道を通ったのではなく、《彼の心》が、《逃亡者の道を進んだ》のである。それに対して、《私》は、国道を通りながら、同時に、意識において《逃亡者の道》を進んでいる。国道と、意識の動きという二つの道の《どちらの道も向う側に通じている》としているが、《私》は、国道を進んでゲリラ側支配地域としての《向う側》に到着することはできても、意識の上で《向う側》に到着ができるという保証を持たない。

ところで、《私》の《逃亡者》としての自覚とは、直接的には、任務からの逸脱、無意味な行動の自覚によって引き起こされたものである。市の外へ出ることで、《彼》についての調査が進むということはあり得ない。とすれば、《私》には、ゲリラ側支配地域としての《向う側》に行かねばならない必然性がない。その、必然性のなき、説明のつかない行為が、調査者としての《私》から、《私》を逸脱させようとする。《私》にとつての《人間の条件》とは、調査という仕事に連なつた、様々な関係性を維持することであり、意味付け、意味付けられながら存在することにあるのである。そして、そのような《人間の条件》から逃れようとするこの困難さは、既に述べた通りである。《私》は、《逃

亡者》としての自覚と同時に、《人間本来の傾向性に忠実な正しい道を進んでいる》という確信を得ているのだが、それがどこに到達するかということとは、自覚されていない。

《私》は、焼けた村に降り立つ。

《焼けあとの空地に立って、ここが向う側だ、と私は口に出して見てみた。まだ熱い灰の堆積の間に、みずばらしい土がめが一個転っていた。何気なく足先きでさわると、とたんに待ってたように音もなく崩れた。むなしさそのものというものは、確かにある、といつてはいいすぎだろう。それがある、たとえいま、ここでないとしつても、という確信に近い予感が、ひしひしとまわりのジャンゲルの沈黙と、その間からっぽの村の透명한空間から迫まってくる。あの男が待っているものが、いま私にはわかる。それがただ待ちつづけるしか、到達する道のないことがわかる。バスも国道もないのだ。しかも待つて待つて待ちつづけても到達できるかどうかの保証が全くないこともわかる。ただ待つただけだ。特派員には、あの朝、不意にそれが訪れたのだろう。》

《私》が到達したのは、《彼》の行ってしまった《向う側》ではない。《私》は、《ここが向う側だ》と《いつてみた》に過ぎないのである。

ここで、《私》が見たのが、土がめである。だが、土がめは、土がめとしての形をとどめはしない。《私》は、土がめを土がめと認識し、それが崩れたことを捉えたに過ぎないが、土がめが土がめでしかないという確固とした確信は、ここにはない。《土がめ》という言葉で現前する実体は、崩れ、《私》の認識は、対象を失う。その時、《私》は、《むなしさ》というものの実在を予感するのである。土がめという実体が

崩れ去ったことが、《むなしさ》を呼び起こすことだったとすれば、《むなしさ》とは、事物がそれを規定している言葉から離れた状態を指す言葉ということになる。言葉で現前している事物とまったく別なのではないが、言葉の届かないところに「在るはず」の状態、言葉の側からは、《むなしさ》としか捉えられないような存在の在り方、それが、《私》の予感したものである。

《男が待っているもの》として、《私》が考えているのは、既成の認識の枠組において規定されている存在を、その規定を逃れて捉え得る世界であろう。それは、《人間の条件》を逃れることによって、相対的でしかない関係性の曖昧さを排し、存在を確かなものと実感できる世界としての《向う側》である。そして、そこに到る確実な方法があるわけではない。

ここで、《私》自身が《向う側》に到達していないことは、明らかである。にもかかわらず、《私》は、次のように続けている。

《これはこちら側（いまは向う側にいるのだから）の言葉だ。向う側ではいふべきことではない。》

この《向う側にいる》という意識は、どこから生じているのだろうか。《私》は、逃亡によって、意味付け、説明し、証明することも可能な、《こちら側》の世界から逸脱しようとした。つまり、《私》は、既成の認識の枠組に疑いを抱き、それを逸脱しようとしてその境界に達したのである。少なくとも《私》自身は、そのような存在として自己を意識している。そのことが、この場面で《私》が《向う側にいる》と意識することを保証するのである。《私》は、《こちら側》の世界から逸脱しようとすることによって《向う側》を理解した。それは、《私》

自身が獲得した理解であり、説明や証明を必要としない理解である。だが、《こちら側》の世界でそれを言おうとすることは、それを説明し証明しようとするのである。そして、《こちら側》の世界で説明され証明されて、理解されること自体が、《向う側》を理解することの対極にあるのである。

《私》が獲得した理解が、《私》自身のものとして、《私》の内にあることと、この言説空間が、《私》の独白としてあることは、連関している。つまり、《私》が《向う側》理解を語ろうとすることは、既成の認識の枠組を相対化しようとすることであり、既成の認識の枠組の内でも説明し証明すること自体の不可能性を前提とした、私的で内的な運動でなければならない。それは、それを語り得ることの根拠そのものを問うことに他ならないのである。

既に、《向う側》が地理上の空間でないことは明らかである。だが、《私》は、確かにゲリラ側支配地域としての《向う側》に入ることによって、それとは別の《向う側》理解を得たのである。そのことは、次のような意味を持っている。

大使館の場面での記述によれば、ゲリラ側の工作員は、何百人、何千人いるか確定できないとされている。また、若い事務官の言葉によって、《向う側》と《こちら側》の境界線は確定できない。そして、会話の時間における報告者の言葉に、次のようなものがある。

《略》あそこでは閣僚だって將軍だって誰だって、完全に向う側でないとはいえません。》

誰もが完全にゲリラ側の人間でないとはいえず、ゲリラ側支配地域としての《向う側》と《こちら側》を、境界線で分けることはできな

い。つまり、《私》が《向う側》理解を得たからっぽの村は、決して特殊な空間ではなく、どこに現れても不思議ではないのである。それは、《私》が、《彼の体》が国道を通っていったとは信じていないこと、《男》が、街の広場がからっぽになると言い、わからないものを《待っている》と言ったことと呼応している。それによって、この作品では、《私》の理解した《向う側》が、どこにおいても在り得る世界として意味付けられることになるのである。

五・最終場面の意味

会話の言説空間が持つ意味と、その機能については、既に触れた。会話の話者のうち、報告者の方は、《私》と同一人物であると考えられる。そして、調査の段階における《私》の個人的な感慨が報告の中に含まれていないことは、報告者の、言葉に表れた任務に忠実な態度だけではなく、その胸に秘められた思いまでをも読み取らせる。報告者が偽りの報告をしているということではない。だが、調査の最後に、《私》の、《いべきことではない》という倫理的な判断があったことは、報告者の心の内に、《ただ待っただけ》という思いもあるであろうことを予想せずにはおかないのである。このように、《私》と報告者を同一人物とみるにより、作品を締め括る、最後の場面の含意が問題となる。

《——結構です。

——ではそういう方向できみの調査報告をまとめてくれ。どのくらいかかるかね。

——三日もあればいいでしょう。

——おかげでこの事件も形がつく。本当にご苦労だった。きみも仕事しか興味のない男らしいな。《きみも》という言葉は、次のような会話を受けている。

《——(略)彼は仕事だけが生き甲斐の男だからな。そうだろう。——そうです。》

このように、最後の場面では、《彼》と報告者(《私》)が同一に評価されている。そして、そのように評価する、報告を受けている人物は、先にみたように、《形のない混沌》を《ナッシング》だとし、《こちら側》の論理に従って《彼》の事件に《形》をつけようとする人物なのである。この人物は、《彼》がゲリラ側支配地域に向かったのだという結論を、《比較的に整ったひとつの形式》として出している。そのことは、この人物自身、その結論が、《こちら側》の論理、既成の認識の枠組において説明可能な《形》でしかないと自覚しているであろうことを意味しているのである。

そのような人物が、《彼》と報告者(《私》)を同一に評価することは、報告者(《私》)が、《彼》と同じように、ある日消えてしまう可能性を暗示しているということが出来る。そして、それは、《私》の独白において、《向う側》に到るためには《待つ》しかなく、《彼》にはそれが《訪れた》とされていたことと対応している。つまり、最終場面の、報告者を評価する言葉は、《私》の独白との緊張関係において、報告者(《私》)が《こちら側》を生きる態度を示唆しているのである。それは、仕事に連なる存在証明を持ち、それに忠実で熱心であり、関係性の中で自己存在を維持しながら、そのような在り方を疑い続けようとする態度であろう。つまり、《待つ》ことの内実は、既成の認識の枠組にお

ける自己存在の規定の、根拠そのものを疑い続けることだといえるのである。作品を締め括る会話の言葉は、その言葉によっては捉えきれない報告者（《私》）の存在を、影のように印象付けている。

六 「向う側」という試み

「向う側」における《こちら側》と《向う側》の対立は、既成の言葉によって捉え得る世界か否かの対立として考えることができる。からっぽの村における土がめがそうだったように、既成の認識の枠組は、言葉による意味付けによって支えられている。論理付け、説明し、証明することを可能にする世界とは、言葉によって規定された世界に他ならない。つまり、言葉による規定で捉えられない世界が、《向う側》として、探究されていたのである。しかし、「向う側」において、《向う側》が直接的に捉えられることはなかった。それは、《向う側》が、常に言葉の外部の世界としてあるからであり、「向う側」を構成する言説そのものの外部に《向う側》が位置してしまふからである。つまり、《私》の独白としてある言説空間においては、《私》の独白が可能な根拠そのものを疑うことによってはしか捉えられない世界として《向う側》があり、同時に、会話としてある言説空間においては、その中で語り得ない影のような世界として、《向う側》があるのである。「向う側」は、そのような二つの言説の緊張関係によって、言説そのものの外部としての《向う側》を暗示しているのである。

以上のような「向う側」読解に立ち、「向う側」が持つ意味を、「向う側」以前の日野の評論との関係から、簡単に述べてみたい。日野は、例えば「存在論的表現論」の中で、次のように述べている。

《私と他の事物との様々の関係において、存在が現成する。表現という行為もそのような諸関係のひとつである。つまり表現とは特定の私「主体」と特定の他者「対象」との出会いによる存在の現成である。》

ここでは、表現することによって存在を現成させることができると思われている。そして、日野は、大江健三郎の「個人的な体験」を論じた文章の中で、その表現を可能にする言葉について、次のように述べる。

《この私は、怪物的原主体の自己限定形である。いわゆる現実とは、怪物的世界の自己限定形である。

自己限定によって、一定の定形を得るが、同時にわれわれが絶対に主体でしかありえない必然性の重さ、この世界が無ではなく存在することの謎の重さは、確実に失われる。小説を書くということは、自己限定された人間と世界を、怪物と謎の世界に再び還元する操作である。人間に宿命を、世界に謎を取り戻す試みである。

どのようにして試みるのか。言葉を使ってである。この現実という限定された極限で通用している言葉を、微妙に異なった仕方で使用することによってである。言葉を社会的なもの、つまり人間と人間との伝達的手段としかみない考え方は、一面的ではない。》

《すでに限定され、固定された事物を伝達する媒介手段としての言葉ではなく、原初の渾沌から存在のヴィジョンを呼び出し浮び上がらせる働きとしての言葉。小説家とくに現代小説家たちが意識的に使用するものは、言語本来のこの機能である。》

少なくとも、小説の表現について、日野は、既成の世界観、人間観

を変革するものと考えている。つまり、『存在の現成』とは、このようであると考えられている存在を、新たに捉え直し、既成の意味付けだけでは捉えきれない存在として示すことなのである。しかし、このような日野の小説観が、たとえ小説観として正当ではあっても、実際の創作において有効性を持ち得るかどうかは別問題である。日野自身の言葉にもあるように、表現は、『特定の私「主体」』によって初めて可能であり、たとえ日野が他者の作品の表現に『存在の現成』を発見したとしても、日野自身が同じように創作できることにはならないからである。そして、日野の説く小説の言葉は、決して単純なものではない。『存在のヴィジョン』を浮かび上がらせる言葉の使い方とはいかなるものなのか。それに対するここでの答えは、『微妙に異なった仕方』としか言われていない。実際それは、表現そのものによって実現されることであり、その実現の仕方を理論的に説明しようとすること自体が不毛であるのかもしれない。だが、少なくとも日野が、小説の言葉に対して、ある理想を持っていたことだけは確かめられよう。そして、日野は、自分自身の創作によって、その理想を実現しようとしたとも考えられるのである。

そこで、『向う側』に戻れば、二つの言説空間の緊張関係によって、既に言葉によって開示された世界を相対化し、未だ実現されていない存在の可能性を示唆しようとしたと評価することもできる。だが、はたして、『向う側』として予感されたものが、日野の言う『存在のヴィジョン』を浮かび上がらせるだけの力を持つかどうかになると、首を傾げざるを得ない。『向う側』において『向う側』は、日野の言葉に即していえば、『自己限定された人間と世界』を否定した時現れるはずの

世界ではない。

しかし、『向う側』以前の日野に、既に、既成の意味付けでは捉えられない存在の感受があり、『向う側』において、あくまで言葉によりながら、既成の言葉では捉えられない世界に到ろうとする人間の姿を示そうとしたことも確かである。つまり、日野は、作家としての出発点を、言葉の外部へ向かう困難な試みに自ら足を踏み入れようとする地点に置いたのだといえる。そして、日野は、これ以後も『向う側』にこだわり続ける姿勢をみせている。それは、『向う側』が、日野にとっ て小説を書くということを促す原動力だからである。『向う側』がいか に表現されていくかということとは、日野の小説の言葉が、言葉の外部としてある故に常に『向う』であるような世界を、いかに捉えていくかということにもなる。このように考えると、日野の創作に向かおうとする姿勢は、『向う側』の中で、『私』が、言葉の世界でもある『こちら側』で生きながら、『向う側』を求め続けようとする姿勢に重なってみえてくるようでもある。

註

(1) 一九六六年三月「審美」二号(署名は「野火啓」)、引用同じ。

一九八八年二月、成瀬書房より、特装限定版として刊行(署名は「日野啓三」)。

(2) 「作家案内——日野啓三」(一九八八年五月講談社文芸文庫版)

『夢の島』。

(3) 「日野啓三論、父の風景」(一九九二年一月「絛説」V)。

(4) 石田氏は、(3)の中で、次のように述べている。

△「この世の境の果ての世界、非現実の場所」としての「向う側」は、「此岸の家」の時期は、海峽を隔てた向こう側というようにまだ具体的な空間であったが、やがてそれは、深く深い心の底、意識の深層、死の世界、都市の自然、宇宙的未知などとといったような抽象的な空間へと発展していく。▽

(5) 「大いなる闇の流れ」(「此岸の家」)「著者ノート」、一九八二年四月河出文庫)、引用は「都市という新しい自然」(一九八八年八月読売新聞社)に拠る。

(6) 一九五九年執筆、発表誌未詳、引用は「存在の芸術」(一九六七年一月南北社)に拠る。

(7) 「状況と地平」中の「小説と怪物」の節、一九六四年執筆、発表誌未詳、引用は「存在の芸術」に拠る。